

訓点資料における訓読語複層性の一様相

—東寺観智院蔵大毗盧遮那広大成就儀軌の場合—

松本光隆

【キーワード】東寺観智院蔵大毗盧遮那儀軌広大成就儀軌康平二年点本、天台宗寺門派、漢文訓読語、複層性、伝授

はじめに

平安時代の一等資料として日本語史の記述・考察には欠かせないと捉えられてきた資料に、訓点資料が存する。平安時代の書写、加點になる訓点資料は、多くの資料に奥書が存して、資料の年代が推定できること、資料の伝来が判ることや、遺存の絶対量が多いこと、平安時代の各期に互って残っていることなどの利点から、日本語の歴史研究の資料として重きを置かれてきた資料である。近年、その訓点資料の資料性が問われる所となり、その一つとして、訓点資料における言語の複層性・重層性が問題として取り上げられるようになった。

例えば、以下の如き場合が端的である。立本寺本の妙法蓮華経は、平安時代の訓点資料としては、極めて重要な資料の一つで、今までにしばしば取り上げられてきた資料である。^①薄い紺地の料紙の同一紙面上に、極めて明瞭な白書の訓点と、朱点、墨点の加點が存する

資料である。この資料には、奥書が存して、資料の成立事情を知りうる重要な手掛かりとなっている。その巻第五の奥書に従えば、白書奥書では、寛治元年（一〇八七）五月十九日に沙門経朝が、赤穂珣照聖人の訓点を白点で移し、定慶聖の音読点を（墨書によって）移点している。朱書奥書では、寛治二年（一〇八八）正月に元興寺明詮僧都（七八八〜八六八）の点を、赤穂聖人の読みと異なるものについて、朱筆で移点したものである。この資料は、同一紙面上に、白点と朱点、また、墨点を、同一人（経朝）が移点したものであるが、その奥書によって、白点は、平安後期の赤穂珣照聖人の訓読語を伝えたものであり、朱点は平安初期（明詮）の法華経訓読の姿を移点したものであると識別することが出来る。奥書によって、加點事情、訓読語の出所が知られる恵まれた資料である。奥書がないとすれば、寛治頃の移点に関わる資料として、推定は可能であろうが、白書、朱書の訓読語の時代性は、不明とせざるを得なくなる。出所に時代差があることが認識されず、同一紙面上に同一人が加點した

資料として位置づけられることとなる。^②こうした時代的に異なった訓読語が、同一紙面上に加点されると、その訓点資料は、時代的な重層性を持つものとなる。奥書の無い資料、または、情報が不十分な奥書を持つ資料における時代的な重層性は、方法を講じねば、それを具体的に解明することが不可能となる。こうした日本語史の資料としての質的問題性を持ち合わせた資料が存するであろうことが、確かであつてみれば、一資料における時代の複層性・重層性は、決して、見過ごすことが出来ない問題である。

以下には、この日本語の年代の複層性・重層性とは異なる訓点資料における複層性・重層性の問題を取り上げて、実態を記述し、訓点資料の資料性について論じてみたいと考える。

一、東寺観智院蔵大毗盧遮那広大成就儀軌康平二年点本の資料的性格について

洛南・東寺観智院金剛蔵には、第二十九函第1号として、大毗盧遮那広大成就儀軌巻下一巻が所蔵されている。料紙は、紙高二十九・八厘の楮紙打紙で、これに界幅一・八厘、界高二十四・三厘の墨界が打たれている。巻首には、欠損がある。現状で、表紙が存しているが、その表紙は、後補のもので、江戸時代、延享三年（一七四六）頃に、賢賀の命によって某人が付したものと思しく、外題「大毗盧遮那広大成就儀軌_下」は、賢賀の筆による。保存状態は、賢賀の修補の後のことと思われる虫損が進み、この類の訓点資料とし

ては、加点された仮名の多い良質の点本とは認められるものの、判読しがたい箇所も多く存する。

本資料は、四種の胎蔵儀軌の内、法全の玄法師儀軌（以下、玄法師儀軌と称する）に当たるものである。玄法師儀軌は、平安時代を通じて、真言両流、天台両派ともに、広く読まれた儀軌で、現存の訓点資料数も多い。

本資料には、奥書が存して、以下通りである。

〔奥書〕^{〔朱書〕}「康平二年（一〇五九）二月廿九日奉隨別處阿闍梨奉始讀之」

〔朱書追筆〕「同年三月六日奉讀之了_{同學信賢}」（コノ下ニ朱書

擦消）

〔朱書追筆〕「此_{廿世}經_{〔稱世〕}以_{〔經〕}房御本」

〔朱書追筆〕「延久二年（一〇七〇）二月廿九日奉從於實相房

奉讀_{〔從〕}布字

八印已下悲愍而救護已上已了_{僧覺〔盡力〕}記之」

〔朱書追筆〕「持珠當心已下、延久二年八月八日奉_{〔從〕}別處奉讀之了」

〔別筆〕「延享第三丙寅歲（一七四六）五月十六日令

修復了

僧正賢賀_{〔奉〕}六十三

この玄法師儀軌には、五種の訓点が認められる。第一種の朱点は、仮名、ヲコト点（西墓点）で、奥書に対応した康平二年（一〇五九）加点の薄い朱点である。第二種の朱点は、この第一種の朱点をなぞ

二、東寺観智院蔵大毗盧遮那広大成就儀軌の訓読と東京 大学国語研究室蔵大毗盧遮那広大成就儀軌の訓読

右の東寺観智院蔵玄法寺儀軌と東京大学国語研究室蔵玄法寺儀軌
卷下(第230冊第3号2)の訓読語を比較してみる。東京大学国語研
究室蔵玄法寺儀軌卷下には、以下の奥書が存している。

(奥書) 文治二年(一一八六) 丙卯月廿日伽佐郡於丹州普甲寺書了

同年五月廿一日 平等院流壽光房 從御口

御本賜受了卯月十六日受了

覺辨

とある資料である。「壽光院」「覺辨」ともに未勘であるが、ヲコト
点法より、院政最末期の天台宗寺門派の資料であると考えられる。
既に、旧稿にて、比較の概要を示したことがある。この東京大学
国語研究室蔵玄法寺儀軌卷下と東寺観智院蔵卷下との訓読を比較して
みると、以下の特徴が認められる。

8、内_レ心に蓮華ヲ敷ケ「_イ蓮華敷_レケタリ」。(東寺観智院蔵

玄法寺儀軌)

内_レ心に蓮_{ヒラ}花敷_ケタリ

(東京大学国語研究室蔵玄法寺儀軌)

の如き例が存して、東京大学国語研究室蔵本の訓読は、東寺観智院
蔵本における墨書の訓読に一致する。東寺観智院蔵本に存する墨点
に注目して、東京大学国語研究室蔵本の訓読と比較をすれば、

9、先_キの佛_ヲ、説_キ(き)たまはく 是れ汝_カか勤_{ユウ}勇_モの曼荼羅_ナな

りと「_イ先_ノ(の)佛_ノ」説_キ(なり)。是(れ)汝_カ(か)
勤_キ勇_モ「平」(の)曼荼羅_ナ「ナリ」

(東寺観智院蔵玄法寺儀軌)

先_キの佛_ヲの説_キ(なり)。是れ汝_カか勤_{ユウ}勇_モの曼荼羅_ナ
り。

(東京大学国語研究室蔵玄法寺儀軌)

10、次の東の第一に(中略)忿怒月厭菩薩_ヲを布_キ「_イ次_ニ「_イ

テニ」東_ニ「ヨリ」第一「二八」(中略)忿怒月厭菩薩_ヲ

「_オ」布_キ「ケ」

(東寺観智院蔵玄法寺儀軌)

次_ニイテに東_ニより第一_ニには(中略)忿怒月厭菩薩_ヲを怖_シ

ケ。

11、金剛牙_ヲ「_イ牙_ヲ」菩薩_ヲ

金剛牙_ヲ菩薩_ヲ

(東京大学国語研究室蔵玄法寺儀軌)

12、千の手_ヲ「_イ手_ヲ」に各_ノ(の)金剛の諸の器杖_ヲ(を)標_シ

リ持_レリ「_イ標_シ」リ持_レタリ」。

(東寺観智院蔵玄法寺儀軌)

千の手_ヲに各_ノの金剛の諸の器杖_ヲヲ標_シリ持_レタリ

13、諸の衆生_ヲの爲_ノの故_ニなり「_イ故_ニ「二セリ」」。

諸の衆生_ヲの爲_ノの故_ニセリ、

(東寺観智院蔵玄法寺儀軌)

14、周匝_{シテ}皆黄_ト暉_ニなり。「_イ黄_{ナル}」暉_{アリ}」。

(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

周_一匝して皆_な黄_訓なる暉_訓あり。

(東京大学国語研究室藏玄法寺儀軌)

などの例のように、東京大学国語研究室藏玄法寺儀軌の訓読は、概ね、巻頭より、東寺観智院藏玄法寺儀軌の墨点の訓読と符合して推移する。

加点の粗密があるが、東寺観智院藏玄法寺儀軌（尾題込、全五四二行）の三六四行目相当の部分の

15、風 空輪の上_{マツ}に絞_{マツ}フ「絞_{マツ}」へ」

(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

風 空輪の上に絞_{マツ}へ。(東京大学国語研究室藏玄法寺儀軌)を最後に、以下、東寺観智院藏玄法寺儀軌においては、墨点の加点が、極端に少なくなり、以降、異同の確例は、

16、磔_イ石_イ衆_去寶_平を等_音す「イ_下等_下」シク」す」。

(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

磔_イ石_イ衆_去寶_平を等_音く(す)。

(東京大学国語研究室藏玄法寺儀軌)

の一例のみである。東寺観智院藏玄法寺儀軌には、三六四行以降の陀羅尼において、朱墨の異同が並記された箇所があるが、これについての東京大学国語研究室藏玄法寺儀軌との比較は、東京大学国語研究室藏玄法寺儀軌についての陀羅尼の加点状況から、困難である。

漢文部分について、右の例16の箇所以降に、東寺観智院藏玄法寺儀軌には、

17、遍照_平の眞言_音に曰_{のたま}はく「イ_下曰_下」ハク」。

(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

の朱点、墨点の並記例が存するが、東京大学国語研究室藏玄法寺儀軌の同文箇所には、加点がない。

以上の状況から、院政期最末期の加点である東京大学国語研究室藏玄法寺儀軌の訓読語は、東寺観智院藏玄法寺儀軌における墨点系統の訓読を伝承したものであると認めて、大過ないのでは無かろうかと考えられる。ただし、前述のごとく、東寺観智院藏玄法寺儀軌において、前半には、墨点の加点が厚いものの、後半部分に、墨点の書入が少ない状況が認められて、この点が問題となる。旧稿においては、東寺観智院藏玄法寺儀軌を一つの資料体として、同一質の漢文訓読語が現れた資料と位置づけ分析を行ったが、墨点の粗密の点からだけでも、この前提に問題が残る。この点については、第四節において詳述したい。

三、平安後期の天台宗門派における大毗盧遮那広大成 就儀の異系統の漢文訓読語の並存

平安後半期の西墓点加点の玄法寺儀軌の訓点資料としては、石山寺藏玄法寺儀軌久安四年（一一四八）墨点、院政期緑青点（校倉第九箱第6号）と随心院藏玄法寺儀軌承暦二年（一一七八）点（第二

函第3号)とが存するが、この両本と東寺観智院藏玄法寺儀軌の訓読の具体例を一部を対照すれば、以下の如くである。

旧稿に、異同の概数を掲げたが、具体的な訓読文における異同例は、

18、是の中にし(て)「イ、中」中「ノ」鉢頭^ニ摩^テあり

(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

是ノ中に鉢頭^ヲ摩^ケリ

(石山寺藏玄法寺儀軌・墨点)

是(の)中の鉢に頭摩(せ)は

(石山寺藏玄法寺儀軌・緑青点)

19、阿吒^ト吒^トの笑^{ワラ}フ聲^{ナリ}

(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

阿^ト吒^ト吒^トして笑^フ聲^ス

阿^ト吒^ト吒^ト笑^フ(ふ)聲^{アリ}

(石山寺玄法寺儀軌・緑青点)

20、手^ニ檀^ニ拏^フの印^ヲ持^シテ

(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

手に檀拏^ノ印^ヲ持^レリ

手に檀^ニ拏^フ印^ヲ持^シ(た)しめ(よ)。

(石山寺藏玄法寺儀軌・緑青点)

の如くで、それぞれに出入りが存する。

また、随心院藏玄法寺儀軌と東寺観智院藏玄法寺儀軌とを比較すれば、

21、内^ニ心に蓮華^ヲ敷^ケ「イ、蓮華敷」ケタリ」。

(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

内^ニ心に蓮花敷^ケリ。(随心院藏玄法寺儀軌)

22、頻^ニ眉^ニにして笑^テ怒^ルの容^{ナリ}

(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

眉^ニ「ヲ」頻^メ、笑^テ怒^ルの容^{ナリ}。

(随心院藏玄法寺儀軌)

23、普花は風火差^ヘヨ。

普花は風と火と差^ヒニ(せ)よ。

(随心院藏玄法寺儀軌)

などの例があつて、この二資料間にも、出入りが存する。

これらの現象を観察する時、平安時代後半期に、玄法寺儀軌の西墓点資料において、複数の訓読の系列があつたと見なくてはなるまい。稿者は、金剛界儀軌を取り上げて、寺門派の複数並存した平安中期末、平安後期初の訓読の内、慶祚の系統の訓読が、部分的な変化は遂げつつも、伝承性強く後世に伝えられたのではないかと論じたことがある。この実態は、金剛界儀軌の場合に述べた如く、玄法寺儀軌の場合に、平安後期に並存したいくつかの訓読で、後に伝承的性格を帯びて伝えられた訓読が有つたもののように認められる。即座には、龍雲房慶祚の系統のものであるか否かの実証はできないものの、一系統の訓読が院政最末期に伝えられていた事実と符合するものと認めて矛盾はない。

右の玄法寺儀軌の資料を比較するに、特徴的には、例えば、西墓点特有の濁音声点「△」が出現するのは、東寺観智院蔵玄法寺儀軌のみであって、石山寺蔵玄法寺儀軌には、「△」の濁声点は使用されないし、随心院蔵玄法寺儀軌にも「△」の使用例がない。また、随心院蔵玄法寺儀軌には、他の西墓点資料には見られない、注音方式（漢字音の頭子音の清濁を区別するもの）も見られるところであって、これらの資料が、同一系統線上に位置づけられることはないと考えられる。即ち、平安後半期にも、活発な注釈・読解活動に基づく下点がなされていたと認められ、天台宗寺門派の玄法寺儀軌については、平安後半期、伝承的性格が生じると共に、祖点と言うべき下点も行われていたものと解釈される。

ただ、右の様相が示す事情が今ひとつ明確ではない。資料資料の成立事情によるところが大きいのではないかと推測されるころであるが、奥書等に手懸かりが乏しく、状況を具体的に捉えることができない。石山寺蔵玄法寺儀軌の如く、宝幢院点加点資料に、西墓点の加点があることを考えれば、寺門派の系統の訓読が、比叡山上でも行われていたとみる余地があるし、三井寺においても、複数の訓読の生成があったかも知れない。今は、平安後半期に、西墓点資料の玄法寺儀軌の訓読に、種々のものがあって、それらが並存していたという実態のみを記述、指摘することとする。

四、東寺観智院蔵大毗盧遮那広大成就儀軌康平二年点本における訓読語の重層

東寺観智院蔵玄法寺儀軌における、朱点に対する異訓である墨点の記載状況について、その概要は先に触れた所である。東寺観智院蔵玄法寺儀軌においては、その前半部分に、屢々現れる、墨訓による異訓並記例が、三六四行目を境に、後半には、極めて少なくなるという状況がある。これと、びたりと一致する訳ではないが、今、奥書の伝授の状況に従って、巻初より「普世明妃真言」末の「娑嚩訶賀」（四〇五行目）までと、「爾時薄伽梵」（四〇六行目）から「悲愍而救護」（五二二行目）まで、「持珠當心上」（五二三行目）以降、巻末までの三部に分かって、その部分部分に現れる言語事象を観察してみたい。最初の部分は、奥書との対応から、康平二年（一〇五九）に、別處阿闍梨から伝授を受けた部分である。第二の中程の部分は、延久二年（一〇七〇）に実相房頼豪から伝授を受けた部分であり、最後の三〇行ほどは、また、別處阿闍梨に従って伝授を受けた部分である。

以下、特徴的訓法を取り上げて、各部分の比較を行ってみる。最初は、並列の助詞「と」の出現状況である。最初の部分には、並列の助詞「と」の読添えが見えないのが特徴的である。

- 24、外に又へて拳（に）作（り）て檀惠直く整てて手に少分ハシメトカを交へヨ。進力頭圓にして忍願整てて相ひ合（）せよ。

(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

とある部分に対して、他本の内、石山寺藏玄法寺儀軌の墨点では、

外に又(へ)て拳逸に作(り)て檀上と恵上と直く堅てて互に

少分を交(へ)ヨ。進上と力上と頭圓上にして忍上と願上と堅てて相

(ひ)合(せ)ヨ (石山寺藏玄法寺儀軌・墨点)

と訓読する。右は、印契法に関する結印における手指の列挙部分で、

こうした身体部位の並列については、右の如くで、例外が認められ

ない。同様の例は、屢々現れて、

25、發生金剛部 金剛鉤平菩薩 手持金剛菩薩 金剛薩埵菩薩

持金剛峰平菩薩 金剛拳上菩薩 忿怒月狀菩薩上を

怖下け (東寺観智院藏玄法寺儀軌)

に対して、

發生金剛部と金剛鉤菩薩と手持金剛菩薩と金剛薩埵菩薩と

持金剛峰菩薩と金剛拳菩薩と忿怒月狀菩薩とを布ケ「布

ケリ」。(石山寺藏玄法寺儀軌・墨点「緑青点も助詞」と)

の出現は墨点と同じ」

の如くである。右、例25は、菩薩の列挙例で、かかる例には、例外

も存して、

26、婆去敷上仙上と仙上の妃上と阿去詣上羅上と瞿去曇上と「及」

毗去哩上瞿上仙上とあり。(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

波敷仙上と仙上ノ妃上と阿詣羅上と瞿曇上と「及」毗哩瞿仙上とあり。

(石山寺藏玄法寺儀軌・墨点「緑青点も墨点と同様に、並

列の助詞「と」の読添えがある」)

の如く、仙上の列挙部分、また、天、龍王の列挙部分などには、並列

の助詞「と」の出現が認められ、先の例25の場合と並存して、訓読

法の揺れを示している。

「與」字に関する構文の訓読も、

27、風輪上、火上與上俱上なり。(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

風輪と「與」火と俱なり。(石山寺藏玄法寺儀軌・墨点)

の如くであって、先に分かった東寺観智院藏玄法寺儀軌の最初の部

分では、並列の助詞「と」の読添えがない。

しかし、中程の「爾時薄伽梵」以降の部分では、以下のように転

ずる。

28、眉間上と咽上と心上と齊上トニ(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

眉間と咽と心と齊上トに(石山寺藏玄法寺儀軌・墨点「緑青

点においても、並列の助詞「と」の出現状況は、墨点に等

しい」)

29、初上と行上と果上と圓上と寂上トナリ。(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

初上と行上と果上と圓上と寂上トノときに「緑青点、圓寂となり」。

(石山寺藏玄法寺儀軌)

30、風上と火上との輪上を和合して(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

風上と火上との輪上を和合して(石山寺藏玄法寺儀軌・墨点

「緑青点も並列の助詞「と」の現れ方は等しい」)

東寺観智院藏玄法寺儀軌中程部分においては、右三例のように、

並列助詞を讀添えるのが普通である。ただし、以下の例の如きものも存して例外に属する訓読法も認められる。この例外は、以下に示すように、文脈解釈が揺れ、石山寺藏玄法寺儀軌では、異読の存する部分である。

31、磔ト石ハ衆ヲ寶ヲを等ニ「シク」す。

(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

磔ト「ト」と、磔ヲ「石ト衆ヲ寶トを」「ト」衆寶二」等（しく）せよ。
(石山寺藏玄法寺儀軌)

三分割の最後の部分は、言語量が少なく、体言の並列構文が認めがたくて、訓読法は帰納できない。

以上の並列の助詞「と」の出現は、最初の部分においては、例外があつて揺れはするものの、読添えないのが普通であつて、それに続く本文中間の部分では、普通に読添えられて訓読法上の対立を示している」と認められる。

今ひとつの事例として、助字の訓読法を掲げてみる。「而」字の訓読は、本文最初の部分においては、次に示した如くである。

32、「於」劫災マの火ニ同シテ「而」三角ノ形ヲ作ルく
(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

「於」劫災ノ火に同せり。而して三角ノ形を作ルく(れり)
「イ、作せり」(石山寺藏玄法寺儀軌・墨点「緑青点も」「而」を文頭で「而て」と訓読する)

右の例は、石山寺藏玄法寺儀軌の訓読と比較すると、句読に違いの

ある例である。文頭の例としては、

33、而も「イ、而」シテ「黒蓮ノ上に在り。

(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

而して黒き蓮ノ上に在り。(石山寺藏玄法寺儀軌・墨点「緑青点」「而（し）て」と訓読)

の例が認められ東寺観智院藏玄法寺儀軌の朱点においては、接続詞「シカモ」が現れる。文中の例でも、

34、一目にして而も諦に觀せり。
(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

一目(にして)而して諦に觀せり(石山寺藏玄法寺儀軌・墨点「緑青点も」「而」の訓読は同様)

35、專請「イ、專」請ニして而も教を受く。
(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

專請して「而」教を受く。(石山寺藏玄法寺儀軌・墨点「緑青点も」「而」は、不読)

36、更互にして而も相ト加セよ「イ、相ト加ヘヨ」。
(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

更互にして「而」相(ひ)加(へ)たり。(石山寺藏玄法寺儀軌・墨点「緑青点も」「而」字不読)

とあつて、石山寺藏玄法寺儀軌の訓読と比較をすれば、東寺観智院藏玄法寺儀軌朱点の訓読語の特徴が際立つように見える。また、文中例としては、

37、彼ニ住して「而」法ヲを説く。

(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

彼^{カシ}に住(し)て「而」法を説く。(石山寺藏玄法寺儀軌・墨点「緑青点も」²「而」の訓読は同様)

38、九執は二羽¹合して空輪竝へて「而」申へよ。

(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

九執は二羽合(し)て空輪竝(へ)て「而」申フ。(石山

寺藏玄法寺儀軌・墨点「緑青点も」²「而」字不説)

の二例が認められて、不説とされている。

やや冗長になったが、右が東寺観智院藏玄法寺儀軌の三分割の内最初の部分に出現する「而」字の全例である。用例数が必ずしも十分に得られないところがあつて、これらから帰納して、「而」字の訓読法を記述することは慎重であらねばならないとは考えるが、その訓読法の特徴は、文頭、文中に「シカモ」訓が認められるところである。

三分割の中程には、言語量は多くはないが、以下の全八例が認められる。

39、本尊³を知り已^{フハ}て本尊の如くして住セヨ。而して悉地を得。
(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

本尊³を知(る)こと已^{フハ}ナハ本尊³ノ如(く)して住して

「而」悉地を得む。(石山寺藏玄法寺儀軌・墨点「緑青点も」

「而」字、不説)

40、而して醇⁴淨の水⁵を服せよ。

(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

「而」醇⁴淨ノ水を服せよ。

(石山寺藏玄法寺儀軌・墨点「緑青点も不説」)

右の二例は、句読が異なるところもあるが、文頭にあつて「シカウシテ」と読まれる。

41、大因陀羅⁶に住して而して「於」阿⁷字を觀せよ。

(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

大因陀羅に住せよ。「而」「於」阿字を觀(し)て

(石山寺藏玄法寺儀軌・墨点「緑青点も不説」)

42、一切の罪⁸を燒滅して而して身語意を生⁹ず。

(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

一切ノ罪⁸を燒滅(し)て「而」身語意を生⁹せ。

(石山寺藏玄法寺儀軌・墨点「緑青点も不説」)

例41・42は、文中例で「シカウシテ」と読まれている。

43、三角にして「而」光¹⁰を具せり。

(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

三角にして「而」光(を)具せり。

(石山寺藏玄法寺儀軌・墨点「緑青点も不説」)

44、遠く住して「而」礼敬し
(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

遠(く)住して「而」礼敬す。

(石山寺藏玄法寺儀軌・墨点「緑青点も不説」)

45、恭敬して「而」遠¹¹ル¹²之¹³。
(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

おわりに

以上、寺門派における玄法寺儀軌の訓点資料を取り上げ、その資料が内包する言語の複層性の問題を検討してきた。ここに取り上げた資料は、奥書によって、複層の可能性の予見と実際の解析が可能な資料であった。その複層性の実態の一端に触れたが、問題は、これらの転写された資料が、全くの一点、一具として後世に伝わることにある。即ち、ある意味で、各所、各所で訓読語が同一基盤ではなく、謂わば、訓読法上の齟齬を孕んだまま、存在し、伝承されることである。訓点資料の資料的価値をいかに評価するかは、色々な角度から可能であろうが、一資料の全文が、同一の言語基盤に立たないものが存することの評価をしなくてはならない。即ち、訓読語が混交し、複層、重層している資料が現に存在する事実からの評価が必要であろう。

漢籍の資料については、同文的箇所と比較から、博士家各家の訓読語の様相が論じられ、和文的な色彩を持つ博士家の訓読語、訓読調の強い博士家の訓読語などが、博士家博士家各家の訓読法の特徴として帰納されている⁷⁾。仏書についても、同様の同文的比較が試みられてきた。しかし、宗派流派の違いに従った、明確な様相としての訓読語の違いが、共時的にすっきりした形で整理され、示されて来なかったように感じる。仏家における宗派流派の伝承性の強弱は、検討を加えてきたところであるが、同文的比較においては、あまり

にも対応関係が多様で、それぞれの宗派流派の訓読語の特質を、抽象化することが、困難であったように思う。

その困難さの背景には、諸種の事情が考えられるであろう。右に取り上げた西墓点加點の平安後半期における玄法寺儀軌の訓読の様態を見ても、資料資料において、特徴的な異同が認められる。東寺観智院藏玄法寺儀軌では、特徴的には、仮名に対する声点が存した。随心院藏玄法寺儀軌においては字音における頭子音を区別した声点が加點されていた。石山寺藏玄法寺儀軌には、相重なり合わない二種の西墓点の加點が存した。これらの状況を俯瞰するに、平安後半期において、一通りの伝承性の強い訓読が伝承されていただけではなく、実際に下点して新たな訓読法の資料が生まれていたことにもなるまい。

また、右に整理、検討を加えてきた実態が、一つの理由として存在するのも知れない。即ち、伝授における師による訓読法の異同が、まだ、生々しく働いており、その伝授の様態によっては、一点、一具の資料中に、さまざまな層の訓読語が入り込んで、一点、一具としては、統一性のない訓読語の並存の状態を醸し出して、それによって訓読法の統一的説明が困難になった場合もあるろう。

右のような実態に対する評価として、新たな訓読語の生成という観点からすれば、宗派間で次第次第に特徴的、個性的な訓読法が稀薄になっていくことと捉えられるのではなからうか。平安後半期における新たな祖点の形成の問題と共に、右の様を取り合わせの訓読

が、新たな訓読語資料を生成していたことでもありと認められるのではなからうか。

平安後半期に、訓読語の複層、重層によって、新たな言語事象が生まれた可能性は、大いに高いものであると評価できよう。

注

- 1、広浜文雄「妙法蓮華経巻第四の訓読文(その一)」(『訓点語と訓点資料』第一輯、昭和二十九年四月)。
 築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』(平成八年五月、汲古書院) 第三部第二章。
 同「妙法蓮華経における明詮の訓説の伝承をめぐって」(『訓点語と訓点資料』記念特輯、平成十年三月)。
 門前正彦「漢文訓読史上の一問題(二)―「ヒト」より「モノ」へ―」(『訓点語と訓点資料』第十一輯、昭和三十四年三月)。
 同「漢本妙法蓮華経古点」(『訓点語と訓点資料』別刊第四、昭和四十三年十二月)。
 小林芳規「訓読法の変遷―平安時代の妙法蓮華経古点本を例として―」(『漢文教育の理論と指導』、昭和四十七年二月、大修館書店)。
 同「妙法蓮華経訓読史叙述のための基礎作業」(『訓点語と訓点資料』第九十輯、平成五年一月)。
 同「『乃至』の訓読を通して観た漢文訓読史の一原理」(『小林芳規』)
- 2、白点、朱点の年代性について、そこに現れた言語事象、例えば、朱点には、副助詞「い」が出現するとか、「者」字に「ヒト」訓があるとか、平安初期の訓読語の特徴が出現することをもって、平安初期の訓読を伝えたものであると推定する道があるようにも思われるが、循環論に陥る危険性が存すると考えられる。
- 3、古くは、中田祝夫博士によって、最古の仮名声点であると説かれたこと(『国語学辞典』「声点」の項、昭和三十年八月)もある資料である。
 築島裕「仮名声点の起源と発生」(『金田一春彦博士古希記念論文集 第一巻 国語学編』(昭和五十八年十二月))
 4、拙著『平安鎌倉時代漢文訓読語史料論』(平成十九年二月、汲古書院)において、本稿に取り上げた東寺観智院藏玄法寺儀軌の訓読語と、東京大学国語研究室藏玄法寺儀軌の訓読語について、簡単な比較例を掲げ、異同の概数を示したことがある。本論の趣旨と重複するところがあるが、行論の都合上、旧稿に比べて、比較例の例文を長めにとつて、同種の比較の行い、論述を進めた。
- 5、拙著『平安鎌倉時代漢文訓読語史料論』(平成十九年二月、汲古書院)第六章第一節。
- 6、例えば、一〇世紀末より一一世紀に掛けて、天元元年(九七八)には、餘慶の法性寺座主補任に関して、永祚元年(九八九)には、餘慶の天台座主補任について、山門寺門の抗争があり、また、

勝算は、両門の抗争によって、比叡山を退去しているし（三井寺
 灌頂脉譜）、長曆長久頃、明尊の天台座主の補任を巡って、また、
 三井寺の戒壇建設について、山門の衆徒が騒ぎ、騒動があつたら
 しい（本朝高僧伝他）。現存の西墓点資料の奥書に屢々現れる三
 井大阿闍梨龍雲房慶祚（九五五〜一〇一九）も、餘慶の天台座主
 補任の山門・寺門の衆徒の騒動で正暦四年（九九三）八月、比叡
 山上にあつたが、朋輩を従えて、一度は、岩倉大雲寺に転じて、
 三井寺に入ったなどの経緯がある（元亨釈書）。比叡山上には、
 「百光房」「山王院」はじめ寺門派の拠点がいくつもあり、また、
 山上との関係が確認できる僧もあつて、内閣文庫蔵三井寺灌頂脉
 譜を検すると、勝算以降、少なくとも、

○心譽〈延暦寺快公法印舍弟〉

○頼豪〈於山王寶前賜寶物印信〉

などであつて、山上との関係が認められる。抗争上の問題はあ
 るものの、三井寺の戒壇問題もあつて、寺門派の山上での活動、
 山上との関係が、抗争と連動して断続的に存したと見ても、矛
 盾はないように思われるし、寺門派の教学上の流の下山後の残
 照かも知れない。また、洛中における山門派との関係も考え得
 るところである。

7、小林芳規『平安鎌倉時代漢籍訓読の国語史的研究』（昭和四十二年三
 月、東京大学出版会）。

8、拙著『平安鎌倉時代漢文訓読語史料論』（平成十九年二月、汲

古書院）。

Two or More Layers on the Aspect for Material of Guiding Marks for Rendering Chinese into Japanese: Daibirusyanakoudaijoujugiki of the To-ji Kanchi-in Temple Owning

Mitsutaka MATSUMOTO

This text takes up Daibirusyanakoudaijoujugiki (大毘盧遮那広大成就儀軌, 玄法寺儀軌) of the To-ji Kanchi-in Temple Kongo-zou (東寺観智院金剛藏) owning and it is the one that the aspect of the Japanese reading word that appears to material was described. It begins to read in the second years of kouhei (1059) in the Heian era. The instruction is received from Bessho-ajari according to colophon. But “布字八印” is unread. Next time, in February of (1070) for Enkyu two years, reads from “布字八印” to “悲愍而救護” according to Jissoubou-Raigo. In addition, it is understood to read the part below “持珠當心上” according to Bessyo-ajari in August, year of two of Enkyu. The Wocoto-ten uses the Nishihaka-ten. It agrees to Bokten of To-ji Kanchi-in Temple this “玄法寺儀軌” when the 1186- ten is compared for “玄法寺儀軌” Bunji two years of The University of Tokyo national language laboratory owning. The tendency of adding ten to Boku-ten presents the situation that adding point is thin uniformly over whole volume in the first half part in To-ji Kanchi-in Temple “玄法寺儀軌” on the boundary of 364 lines in the latter half though adding point is thick. When the first half and an inside half are the one when the Japanese reading methods in the partial part are compared by dividing To-ji Kanchi-in Temple “玄法寺儀軌” into three based on the aspect of the instruction that can be read from the colophon to do the character especially, it is induced. It is pointed out that the Japanese reading word is different though it is material in one volume according to the difference of the instruction that can be read from the colophon under the skin. The phenomenon shows two or more layers of the Japanese reading word in one material, and the matter that requires noting as material of the Kuntens-siryō one side.